ユネスコスクール活動事例集

第 8 集

愛知県

愛知県教育委員会

目　次

特集 愛知県のSDGs達成に向けた取組		2
ユネスコスクール活動事例①	**豊橋市立西郷小学校**	4
ユネスコスクール活動事例②	**豊橋市立玉川小学校**	6
ユネスコスクール活動事例③	**豊橋市立嵩山小学校**	8
ユネスコスクール活動事例④	**名古屋大学教育学部附属中・高等学校**	10
ユネスコスクール活動事例⑤	**愛知県立豊田東高等学校**	12
ユネスコスクール活動事例⑥	**名古屋市立北高等学校**	14
ユネスコスクール活動事例⑦	**名古屋市立山田高等学校**	16
ユネスコスクール活動事例⑧	**名古屋市立名古屋商業高等学校**	18
ユネスコスクール活動事例⑨	**中部大学第一高等学校**	20
愛知県ユネスコスクール交流会		22

はじめに

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、1953（昭和28）年に創設された、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育、といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校です。2018（平成30）年10月現在、世界182か国で11,500校以上のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、1,116校を数えます。愛知県では、2014（平成26）年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、現在申請中を含め166校が活動しており、国内最大規模となっています。

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、学校においても臨時休校の措置が取られる異例な状態から始まりました。日常生活においては、新しい生活様式として、「3密」や「ソーシャルディスタンス」という言葉に代表されるように、新たな感染症対策を行うなど、今までに直面したことがない問題に対応をすることが求められました。今、我々が過ごしているコロナ禍はまさに「正解のない問いに対峙している」と言えるのではないでしょうか。この状況を変えるためには、一人一人が「何ができるのか」を考え、行動することが重要です。本年度から小・中・高等学校にて順次全面実施されている学習指導要領の前文及び総則においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、各教科指導においても、ESDの視点での授業改善が求められるなど、自律心、判断力などの人間性を育むことや、他人との関係性を尊重できる児童・生徒を育むことが求められています。

愛知県教育委員会では、本年度もユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業及び加盟支援事業として、児童・生徒・学生・教員等が交流し、学び合う「ユネスコスクール交流会」の開催を始め、ユネスコスクールへの研修講師派遣、及びESDを実践できる教職員の育成を目指し、管理職・ESD実践担当者等を対象とした研修会を実施いたしました。本年度は、コロナ禍に対応するため新たな試みとしてWeb会議システムを活用したオンライン、あるいはオンラインを併用したハイブリッド型で実施をしました。

本事例集は、県内各地でESD活動に取り組むユネスコスクールの実践をまとめたものです。ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるとともに、未来を担う子供たちの学びに向かう力を育むきっかけとなることを願っております。

結びに、本事例集作成にあたり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会を始めとした関係の皆様に心より感謝を申し上げます。

2021（令和3）年3月

愛知県教育委員会

特集 愛知県のSDGs達成に向けた取組

LEAVE NO ONE BEHIND 誰一人取り残さない

SDGsとは？

誰一人取り残さないようにするために、世界で取り組む17の共通の目標

- 1 貧困をなくそう
- 2 飢餓をゼロに
- 3 すべての人に健康と福祉を
- 4 質の高い教育をみんなに
- 5 ジェンダー平等[※1]を実現しよう
- 6 安全な水とトイレを世界中に
- 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 8 働きがいも経済成長も
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 10 人や国の不平等をなくそう
- 11 住み続けられるまちづくりを
- 12 つくる責任つかう責任
- 13 気候変動に具体的な対策を
- 14 海の豊かさを守ろう
- 15 陸の豊かさを守ろう
- 16 平和と公正をすべての人に
- 17 パートナーシップ[※2]で目標を達成しよう

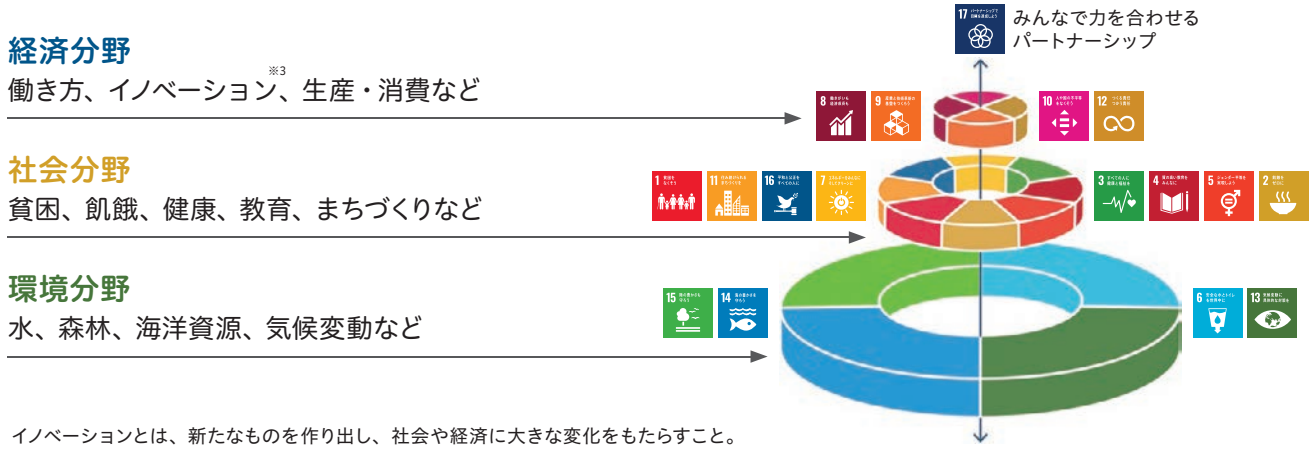
※1 ジェンダーとは、社会的・文化的な性別のこと。
※2 パートナーシップとは、みんなで力を合わせること。

Sustainable（持続可能な）Development（開発）Goals（目標）

SDGsとは、2015年に国連加盟国によって総会決議された持続可能な17の開発目標のこと。2030年までにこれらの目標の達成を目指しています。

SDGsの考え方

SDGsの17の目標は、「経済」「社会」「環境」という３つの分野に大きく分けることができます。下の図では、経済分野は社会分野に、社会分野は環境分野に支えられ、３つが密接に関わっていることを意味しています。さらに、３つの分野の課題を解決するためには、みんなで力を合わせて解決に向けて協力する「パートナーシップ」が重要になります。



※3 イノベーションとは、新たなものを作り出し、社会や経済に大きな変化をもたらすこと。

〈参照〉Stockholm Resilience Centre https://www.stockholmresilience.org/research/research-news/2016-06-14-how-food-connects-all-the-sdgs.html
〈原図〉Jerker Lokrantz/Azote 〈考案者〉Johan Rockström and Pavan Sukhdev

私たちの住むまち

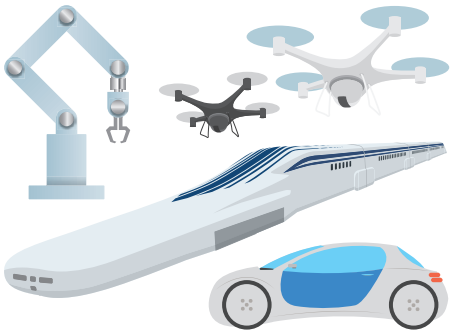
愛知県SDGs未来都市計画について

愛知県が2030年までにさらに住みやすいまちになるための取組

経済・社会・環境の３つの調和がとれた県を目指す

愛知県は、2019年７月に内閣府から、SDGsの達成に向けた優れた取組を実施する「SDGs未来都市」に選ばれました。経済・社会・環境をめぐる幅広い課題に一体的に取り組みながら、すべての県民のみなさんと一緒に持続可能な社会を目指しています。

経済分野



〈SDGsにつながる取組〉

- 近未来技術等の社会実装の推進
- スタートアップ※と既存企業の連携によるイノベーションの創出
- 自動車分野における新事業展開支援
- 「モノづくり×AI・IoT※」をテーマとした大学対抗ハッカソン※の開催

世界をリードする日本一の産業の革新・創造拠点

環境にやさしい未来の自動車や飛行機、ロボットなどの開発に取り組み、世の中を変える新しい技術を持った企業がどんどんと生まれるような地域を実現します。

〈※用語解説〉• スタートアップ：急成長が期待される設立間もない企業のこと　• IoT：さまざまなモノがインターネットにつながること
• ハッカソン：パソコンを活用して新たな製品・サービスの開発を競い合うイベント

社会分野

〈SDGsにつながる取組〉

- 若者の活躍促進
- 女性の活躍促進
- 高齢者の活躍促進
- 障害者の活躍促進
- 外国人の活躍促進

人が輝き、女性や高齢者、障害のある人など、すべての人が活躍する愛知

人口の減少や、高齢者の増加がますます進んでいく中、年齢や性別、障害の有無、国籍などに関わらず、どのような人でも活躍でき、全員で支え合う社会を実現します。

環境分野

〈SDGsにつながる取組〉

- 「あいち地球温暖化防止戦略2030」の推進
- EV・PHV・FCV※の普及促進
- 循環型社会に向けた取組
- 自然との共生に向けた取組
- 行動する「人づくり」

県民みんなで未来へつなぐ「環境首都あいち」

県民のみなさんが、あらゆる場面で環境のことを考えた行動をすることで、安全で快適な暮らしを守り、環境と経済がうまく共存できる地域を実現します。

〈※用語解説〉• EV・PHV・FCV：電気自動車・プラグインハイブリッド車・燃料電池自動車の略

※各分野の目標は愛知県が独自に選定したものです。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

豊橋市立西郷小学校

創　立：1872年
住　所：〒441-1103 豊橋市石巻萩平町城脇164-2
連絡先：TEL 0532-88-0271　FAX 0532-87-1013
学級数：8　児童数：110人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/saigou-e/

ふるさと西郷に自信と誇りをもつ子を目指して

はじめに

西郷小校区は、市内でも一番広い面積があり、カタクリの花が咲き乱れ、ホタルが舞うなど自然豊かなところである。また、富士山や南アルプス連峰、豊橋市街などが一望できる吉祥山や３つの滝など美しい景観も備えている。校区住民は、人情味厚く子供たちを見守る目も温かい。自然を生かして特産である次郎柿、梨など果樹栽培を始めとして農業がとても盛んである。このような素晴らしい西郷校区のよさを再認識し、問題解決的な学習を通して、ふるさと西郷に自信と誇りをもつ子を育てていきたい。

実践内容❶
「西郷の最高の柿？柿！柿♥」

ねらい：地域で100年以上栽培され続けている柿を郷土の誇りとし、そのよさを伝え広めるとともに、校区の農業の課題について考えることができる。

校区には広大な柿畑があり、百年以上前から柿が栽培されている。毎年、全学年が柿の摘果や収穫体験を行い、郷土の宝「次郎柿」への愛着を深めている。

３年生は、６月、地域の産業である柿栽培について学び始めた。校区の柿栽培のリーダーに、柿作りや柿を使った商品開発について教えていただいたことで、子供たちの柿への関心が高まった。摘果を行った際には、柿農家の方のアドバイスを受けながら、どの実を摘み、どの実を残すとよいのかを考えながら実を摘む姿が見られた。秋になり、柿を収穫した子供たちは、実りの喜びを得るとともに、「西郷の柿のよさを広めたい」という願いをもった。そして、多くの人に西郷の柿のおいしさを伝え広めるために、市内の朝市に出向いて販売したり、行事の際に来校した保護者に販売したりした。また、柿の苦手な人にも食べてもらえるようにと、柿を加工して「柿ジャム」を作った。

６年生は、９月、キャリア教育の一環として、柿農家の方から話を聞いた。柿の栽培だけでなく、どうしたら商品価値が上がるのかなど、経済の観点からも話をしていただいた。また、高齢化社会を迎え、柿の栽培面積が年々減少している事実を知った子供たちは、今後の西郷校区の農業の課題にも目を向けることができた。

三八の市で柿を販売する子供たち

成　果

３年生は、農家の方の苦労や喜びを知るとともに、地域の方や朝市のお客さんとの交流を通して、西郷の柿が、地域の自慢であり誇りであるとの思いを高め、そのよさを伝えるために意欲的に行動することができた。６年生は、西郷校区の柿農家の現状と課題を知り、これからの西郷校区について考えることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「守っていこう！ふるさとの自然」

ねらい：吉祥山の自然を体感することで、自然の豊かさや素晴らしさを守っていこうという気持ちを育てる。

先輩が作った看板をきれいにする子供たち

毎年、４年生は、校区にある吉祥山（標高382m）登山に挑戦している。吉祥山は、古くから地元の人の生活に利用され親しまれてきた山で、豊かな自然が残されている。

子供たちは、「吉祥山ボランティアの会」の方に吉祥山の自然について教わりながら山頂を目ざした。歩きながら、植物、岩や土、においなど、山の自然に興味を示す姿も見られた。途中、西郷小の先輩が描いた吉祥山の絵が印刷されている自然保護の看板の汚れを落とす活動も行った。また、木の実を拾ったり、頂上から豊橋市街や三河湾を眺めたりして自然を体感した。

成 果　山の自然の豊かさを再認識するとともに、地元の自然を守り伝えている人がいることを知ったことで、自分たちも自然を守っていきたいという気持ちをもつことができた。

実践内容❸

「届けよう！平和と友情 ～西郷小の宝物『コネタ』～」

ねらい：青い目の人形『コネタ』について学び、平和の大切さや国を超えた友情について考えることができる。

学芸会でコネタを守った先生の話を熱演する６年生

本校には、1927年に日米友好の親善大使として送られた青い目の人形『コネタ』が現存する。『コネタ』は、その愛らしさから子供たちに人気である。毎年、豊橋市図書館が主催する「平和を求めて とよはし」展で展示され、多くの市民の目にも触れてきた。

学校では、「コネタ集会」を開き、全校児童が参加している。子供たちは、「青い目の人形の歌」を歌ったり、６年生が調べた『コネタ』の歴史に関する発表を聞いたりして、『コネタ』がアメリカからやってきた頃に思いを馳せた。戦争中も守り続けられた『コネタ』の尊さを理解するとともに、『コネタ』を平和のシンボルとして捉え、平和と友情の大切さについて考えた。

成 果　青い目の人形『コネタ』が大切にされていることの意味や、その歴史について学ぶことで、『コネタ』に関わってきた人々の思い、戦争と平和、国のつながりなどについて考えることができた。

おわりに

これまでこの素晴らしい自然と風土の西郷校区をあまり意識してこなかった子も多かった。しかし、柿の栽培や販売に努力をしている人たちや自然を守ってきたきた人たち、コネタを救い友情の大切さを伝えた人たちのことに視点を向けて課題を見つけ、問題解決的な学習に取り組んだ。この学習を通して、子供たちはふるさと西郷の素晴らしさに触れ、この素晴らしさを持続していくためには、自分たちはもちろん多くの人の努力の継続が必要であることを学んだと確信している。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

豊橋市立玉川小学校

創　立：1873年
住　所：〒441-1115 豊橋市石巻本町野添10
連絡先：TEL 0532-88-0007　FAX 0532-87-1014
学級数：12　児童数：258人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/tamagawa-e/

校区から学び、ふるさと玉川への愛情を深める子

はじめに

本校区は、豊橋市の北部に位置し、石巻地区特産の柿畑が広がる豊かな自然と史跡に富んだ校区である。一方で、自動車の交通量が増加しており、校区の方々が子供見守り隊として通学路に立ち、子供の安心・安全に協力してくださっている。子供たちは、明るく、純朴な子が多く、異学年の子とも仲がよい。そのような校区の環境のなかで、校区の「ひと・もの・こと」に繰り返し関わることで、課題を自分事としてとらえ、意欲的に学習に取り組む力を、そして、探究していくなかで、自分ができることを考え行動する力を育てることを目標とし、生活科や総合的な学習を中心に実践を行っている。

実践内容❶
「4年生出動！『守ろう！ぼくらの神田川』大作戦」

ねらい：神田川の環境を守り、地域に愛される川にするために自分たちにできることを考える。

玉川校区を流れている神田川。4年生は、6月、この川に探検に出かけた。当日は雨模様。「いつもより流れが速いし、水がにごっているよ」など、川の様子に興味津々の子供たち。また、橋の欄干に卒業生が描いた絵が彫られていることに気付いたり、川岸の看板を見て「一級河川」であることを知ったりして、神田川への関心が更に高まった。

後日、子供たちは、神田川の水質調査を行った。試薬を使った水質検査や水生生物調査、過去の調査結果との比較などを通して、川の水質を客観的に捉えることができた。

神田川は上流にいくと嵩山（すせ）川と名前を変える。「神田川と上流の嵩山川では、水質や川の生き物は違うのか」と、疑問をもった子供たちは、嵩山川の調査に出かけた。嵩山川では、嵩山小の4年生にホタルの生態に関わる活動について教えてもらったり、神田川の調査と同じ方法で水質を調べたりした。生物調査では、トビゲラを見つけ、水のきれいさを実感していた。

また、校区の方に神田川の昔の様子について教えていただいた。昔は、魚つりや川遊びを楽しんだこと、川で水泳の授業をしたことなどを知り、校区の人々にも親しみのある大切な川であることを改めて感じたようだった。そして、神田川を守っていきたいという思いをもった子供たちは、できることを考えて実践した。その一つとして、学習発表会では、「こんな神田川にしたい」という願いを、全員で一枚の絵に表して校区の方へ伝えた。

神田川で水質・生物調査をする様子

成果

神田川について調べたり、校区の方の話を聞いたりする中で、これからもずっと川の環境を守っていきたいという思いを高め、川のためにできることを考えて実践することができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「もっと見たい!もっと知りたい! わたしたちの『玉川』」

校区にある宮西古墳を探検している様子

ねらい：玉川校区の「ひと・もの・こと」に目を向け、校区への関心を高める。

「玉川校区の『すごい』をさがす」をテーマに、２日間の校区探検をした２年生。１日目は、南消防署石巻出張所、玉川保育園、イチゴ農家、産直プラザ石巻などを見学し、どの場所でも、発見したことや聞いたことを熱心にメモする姿が見られた。また、次の目的地に向かう道すがら、樹木の枝についているヤドリギや道端で咲いている花にも興味をもった。２日目は、石巻地区体育館や給食を作っている豊橋北部調理場、宮西古墳などに行った。歩いて、見て、聞いて、たくさんの『すごい』を見付けた２日間だった。さらに、子供たちは、探検で探したすごいから追究を進め、さらに調べたいと思った施設、史跡、農家などに二度目の探検に出かけて行った。子供たちは、玉川校区にさまざまな施設や史跡、いろいろな仕事をしている人がいることなどを知るとともに、校区のことをもっと知りたいという思いをもった。

成 果　『すごい』を見つけるという目的意識をもって校区探検をしたことにより、玉川校区の「ひと・もの・こと」を見つめ直し、新たな発見や驚き、疑問などをもつことができ、校区に対する関心と追究意欲が高まった。

実践内容❸

「玉川お祭りマスターになろう」

祭りの話をする校区の方の様子

ねらい：校区の祭りに関心をもち、郷土の伝統文化への理解を深め、引き継いでいこうとする思いを高める。

３年生は、校区の神社に伝わる祭りについて学習した。校区の祭りに詳しい方を招いて「高井や和田地区に伝わる祭り」や「手筒花火や綱火」について話をしていただいた。校区の方の祭りへの熱い思いを知るとともに、昔から伝わる祭りの支度や所作には人々の願いが込められていること、みんなで一緒に祭りの準備や活動を行うことで校区の絆が深まることなどを知った。子供たちは、これまで参加して楽しむだけだった地元の祭りについて、そこに込められた思いや願い、引き継がれてきた意味があることを知り、校区の伝統行事への見方が広がった。

成 果　祭りに込められている願いや人々の思いに目を向け、校区の伝統文化を大切にしたいという気持ちを高めるとともに、玉川を愛する心を育むことができた。校区に伝わる祭りに積極的に参加することができた。

おわりに

校区の方々に支えられながらの活動により、子供たちは校区のなかで見守られて成長している。身近な教材は、子供たちにとって課題意識をもちやすく、進んで活動に参加する態度が見られたり、校区の方との温かな人間関係が育まれたりした。情報社会である現代にあって、これからの社会を築いていく子供たちにとっては、校区の「ひと・もの・こと」との関わりはとても大切な絆となると考える。校区を愛し、校区とともに生き、自分たちの暮らす玉川を「大好き」と言える子供たちを育てるために、今後も活動を継続していきたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

豊橋市立嵩山（すせ）小学校

創　立：1873年
住　所：〒441-1111 豊橋市嵩山町宮下78-1
連絡先：TEL 0532-88-0008　FAX 0532-87-1015
学級数：8　児童数：73人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/suse-e/

地域のよさを理解し、ふるさと嵩山を愛する子の育成

はじめに

本校区は、豊橋市の北東部に位置し、自然が豊かな環境である。校区の方は、地域の文化を重んじ、学校の教育活動に協力的で、温かい人間関係が形づくられている。

本校は、地域の教育力を活用した地域学習「嵩山学」を推進しており、感性と創造力を育むとともに、地域を理解し愛していこうとする態度を養うことを目指している。総合的な学習の時間を柱に、さまざまな教科・領域で、地域や学校の特色を生かした体験活動を位置づけ、地域の「ひと・もの・こと」を重視した授業実践に取り組んでいる。

実践内容❶
「守ろう ホタルの里『嵩山』」

ねらい：ふるさと嵩山の自然の魅力を理解し、それを未来につないでいくために活動することができる。

初夏、嵩山川では、ホタルの光の舞を見ることができる。本校が、NPO法人「朝倉川育水フォーラム」の協力を得ながらホタルの飼育と放流活動を始めて16年。本年度は、1913匹のホタルの幼虫を嵩山川に放流した。

ホタルの幼虫の飼育は、4年生が中心となり、餌となるカワニナを採取すること、成虫に卵を産ませて孵化させること、水温や水質の管理と幼虫の世話などに取り組んでいる。また、子供たちは、ホタルの生態や地域の自然環境などについて調べたり、嵩山川の環境調査や保全活動を行ったりしている。

ホタルの幼虫を放流する子供たち

11月、幼虫の放流に先立って、4年生は、ホタルについて学んだことを下級生に発表した。自分たちの学びや取り組みを伝えることで、ホタルに対する思いや活動の意義などを下級生に引き継ぐことができた。4年生の発表後は、いよいよ全校での放流会。子供たちは、ホタルの幼虫を、餌となるカワニナと一緒に川に放流した。「また来年会おうね」と、少し名残惜しい表情を見せながら、幼虫をそっと川に流していく子供たち。ホタルの命のバトンをつなぎながら、これからもずっと、ホタルが舞う嵩山の自然環境を大切にしていきたいという思いをもった。

成　果

ホタルの幼虫を育てて地域の川に放流する活動に継続的に取り組んできたことで、生き物の命を慈しむ心が育まれた。また、地域の自然環境に関心をもつとともに、自然を大切にし、豊かな自然を未来につないでいきたいという思いをもつことができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう | 2 飢餓をゼロに | 3 すべての人に健康と福祉を | 4 質の高い教育をみんなに | 5 ジェンダー平等を実現しよう | 6 安全な水とトイレを世界中に | 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「地域とともに ～わたしたちの農業体験～」

ねらい：地域の「ひと・もの・こと」を活用した農業体験を行うことで、地域への理解と愛情を深めることができる。

足踏み式脱穀機を使っての作業

嵩山小では、田畑が多いという校区の特色を生かして全校で農業体験を行っている。農業ボランティアの協力を得て野菜や米を作ったり、収穫したもち米を使って地域の方と一緒に餅つき会をしたりするなど、積極的に地域と交流している。

本校では、毎年、全校でサツマイモの栽培をしている。本年度は、6月に縦割り班（だるま班）でつるさしを行った。地域の方からアドバイスをいただき、高学年が低学年に教えながら活動したことで、どの子も上手に作業することができた。サツマイモを収穫したのは10月末。やる気満々の子供たちは、農業ボランティアに手伝っていただきながら、「土が固くて抜けないよ」「このサツマイモはすごく大きいよ」などと、言葉を交わしながら楽しそうに活動していた。

また、全校でイモの栽培を行うだけでなく、低学年は、夏野菜や冬野菜の栽培、5年生は、米作りにチャレンジするなど、各学年における農業体験も充実している。地域の環境と人材を生かした農業体験を通して、子供たちのふるさとへの愛情や地域の人への感謝の気持ちが育まれている。

本年度、5年生は6月に地域の方と一緒に田植えを行った。植え付けたのは、もち米と古代米。もち米と古代米は、育つにつれて色に違いが出てくる。子供たちは、その色の違いを生かして田んぼアートをつくることを計画し、何度も話し合って文字を「スセ小」に決め、植え付けの設計図を作って田植えをした。稲が育ってきた8月、米作りに関する疑問を解決するために、校区の米農家を訪問し、水の管理方法や米作りの苦労などを聞いた。子供たちは、話に耳を傾け、聞き逃さないように真剣にメモをとっていた。秋、いよいよ稲刈り。農家の方の指導のもと、慣れない手つきで稲を刈り、乾燥させるために、はざかけをした。そして、最後は脱穀作業。あえて昔の道具「千歯こき」と「足踏み式脱穀機」を使った。脱穀も、地域の方に教えていただきながら作業を進めた。子供たちは、昔ながらの方法で脱穀に取り組んだことにより、「食」とそれに関わる人の苦労や思いにも目を向け、これまで以上に一粒のお米を大切にしようという気持ちが高まった。

12月、お米の学習でお世話になった農業ボランティアの方への感謝の気持ちをこめて「お米の会」を開いた。収穫したもち米で作った餅を地域の方と一緒に食べたり、お米に関するクイズを出題したりして楽しく過ごし、心のこもった温かい会になった。

ボランティアさんとサツマイモの収穫

成 果

農業体験を通して喜びや成就感を味わうとともに地域の方への感謝の思いが育まれた。また、自分たちの「食」が自然の恩恵を受けていることや、作物を育てる大変さや農家の方の思いを知り、地域の自然や人々の営みへの理解と愛情が深まった。

おわりに

本校では「未来にはばたく嵩山学（すせがく）」を活動テーマとして、地域と連携し、特色ある教育活動を推進してきた。

子供たちは、ホタルの幼虫の飼育を通して、地域の自然環境を守ろうとする態度を育て、米作りやイモの栽培を通して郷土や農業に携わる人々に対する理解を深めてきた。また、全校の縦割り班（だるま班）で、校区の休耕地の畑を有効利用し、農作物を育てることを通して食への感謝の気持ちを高めている。

今後もこれらの活動を通して、ふるさとを大切に思う心と未来を生き抜く力を育成していくとともに、身近な活動をもとに持続可能な社会について学習を深めていきたい。

環　境　**国際理解**
地域文化　気候変動
生物多様性　防　災
エネルギー　そ の 他

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

創　立：1947年
住　所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
連絡先：TEL 052-789-2680　FAX 052-789-2696
学級数：15（中学6 高校9）　生徒数：600人（中学240人 高校360人）
H　P：https://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp

パートナーシップで目標達成

はじめに

本校は2010年にユネスコスクールの仲間入りをし、本年度は10年目を迎える。この間、国内外の多くの学校と交流を行い情報を共有することで世界中にネットワークを形成してきた。コロナ禍においても「ユネスコの学びを止めない」という考えで本年度はオンラインを駆使しながらの国際交流事業を推進した。単独校ではできない活動も交流校があるおかげで実現することも多い。これからは、様々な人たちとの関係をさらに大切にしながらユネスコスクールの活動を継続していきたい。

実践内容❶
「コロナ禍でもできるアジア高校生会議」

ねらい：「できない」ではなく「どうしたらできるか」を考える

毎年、名古屋大学を会場として「アジア高校生国際会議」を開催している。「アジア架け橋プロジェクト」で来日している高校生や日本の高校に留学している海外からの高校生が、日本の高校生と共通テーマで議論するのが「アジア高校生国際会議」である。本年度は、コロナ禍の影響で海外留学ができなくなった。そのため、来日する留学生も非常に少なく「国際会議」開催が危ぶまれる中、２日間の日程で「高校生国際会議」をオンライン開催した。カンボジア、台湾、インドネシア、モンゴルから約60名、日本から約40名の高校生が参加した大きな「国際会議」となった。テーマは、「Covid 19と共存するための理想的な学校教育」である。生徒たちは10の小グループに分かれ議論を行った。それぞれのグループには、名古屋大学の留学生がファシリテーターとして入り、議論を進行した。１日目は、オンライン授業を行っている国、すべての家庭に通信ネットワーク環境が十分整っていないためオンライン授業ができない国、オンラインと対面をうまく使い分けながら授業をしている国といった様々な学習環境の現状を参加者で意見交換した。今後もコロナの状況は、一足飛びに解決する方向には向かわないであろうという中で、高校生が考える学校教育について議論し、２日目はその発表を行った。

「みんな学校が大好き」

成　果

海外との交流がなかなかできない状況下であっても、生徒たちは英語を使って同世代の仲間と話をすることができた。今実際に起こっている現状がテレビや新聞といった媒体を通してでしか感じられなかった世界の現状をリアルに体験することができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「モンゴルのゲルが学校にやってきた!」

ねらい：すべての生徒が体験できること

毎年夏になると、代表生徒がモンゴル・ウランバートルの姉妹校（新モンゴル小中高一貫学校）を訪問する。その体験をすべての生徒と共有するため、学校祭（光粒祭）でゲル（伝統的な移動式住居）を制作し、その内部にモンゴル訪問で生徒が学んだことを展示している。制作には、名古屋大学のモンゴル人留学生も参加し、ゲルを制作しながら生徒たちは、ゲルの機能や便利性について留学生から話を聞いている。学習内容の展示に加え、ゲルの中には、実際のベッド、民族衣装や子供たちの遊び道具も展示している。民族衣装も自由に着装することができ、民族衣装をまといながら写真をとっている生徒も多くいる。

校内に完成したゲル

成 果　学校祭を一般公開しているため、本校関係者だけでなく小学生や地域の方々など多くの来校者があり、本校の教育を学校内外に普及することができた。また、実際にモンゴルを訪問できなかった生徒もモンゴルでの生活を追体験する機会となった。

実践内容❸
「リトアニアに生きる杉原千畝」

ねらい：ホロコーストから平和を考える

本校と瑞陵高等学校（杉原千畝の母校）と協同で行っているプログラム。毎年、お互いの生徒がリトアニアと日本を相互に訪問し、それぞれの国にある杉原千畝にまつわる場所を訪問し「平和」についての理解を深めている。センポ・スギハラ・メモリアルのオープンセレモニー（平成30年10月）が瑞陵高等学校前にオープンした際には、その式典にも本校生徒やリトアニアの生徒が出席した。リトアニア訪問の際には、日本大使館やリトアニア・カウナスの杉原記念館を表敬訪問する。ホロコースト（ユダヤ人の大量虐殺）が起こった原因をそれぞれが考え、二度と同じ状況があってはならないと誓い、平和について考える貴重な機会となっている。

当時のゲットー（強制収容所）の様子

成 果　リトアニアを実際に訪問し、現地の高校生との議論を通して学ぶ機会となっている。また逆にリトアニアの生徒が杉原千畝の生まれた日本を訪問しその軌跡をたどることで、両国を結んだ偉人についての理解を深めることができた。

おわりに

SDGs目標達成まで10年を切る中、新型コロナウイルス感染症拡大により、SDGsで取り組むべき世界共通の課題が改めて浮き彫りになった。また、この世界では予測しえない課題や困難が常に起こり、その解決どころか理解すら容易ではないという事実も再認識できた。コロナ禍の今だからこそ、SDGsの目標達成をパートナーシップの力で成し遂げようと思う。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

愛知県立豊田東高等学校

創　立：1924年
住　所：〒471-0811 豊田市御立町11丁目1番地
連絡先：TEL 0565-80-1177　FAX 0565-80-5066
学級数：18　生徒数：716人
H　P：https://toyotahigashi-h.aichi-c.ed.jp/

夢の実現に向けたESD活動

はじめに

環境教育、国際理解教育、地域連携教育を３つの柱として、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組んでいる。３つの柱を融合させ、人種、年齢、性別の違いを超えて幅広い人との交流を活発に行っている。将来「持続可能な社会」作りのための担い手となって地域社会に参加する態度や、問題を解決する力を持った生徒を育てることを目指しており、人と人とのつながりの中で、相手を理解し、自分の視野を広げ、自主的に行動する力やコミュニケーション能力の育成に力を注いでいる。

実践内容❶「地域環境研究セセラギプロジェクト」

ねらい：身近にある矢作川を取り上げて、地域の環境問題について考えを深める。

１年生「産業社会と人間」の授業で、地域環境研究セセラギプロジェクトを実施した。事前講演会にて、矢作川森林塾、矢作川研究所、国土交通省、愛知学泉大学、大同大学の講師の先生方に矢作川の現状について講演していただいた。生徒たちは、講師の先生方の指導を受けて、散策路マップの作製、樹木の伐採、セセラギの植物調査、ツバキの実・クルミの収集、水生生物の調査、カメの調査、土嚢の製作、自噴池の水の流れの調査など、グループに分かれて活動を行った。後日、矢作川の運用について各班でディスカッションと報告書の作成を行い、環境問題についての考えを深めた。

矢作川の水生生物調査

成　果

カメの調査では、ミシシッピアカミミガメなどの外来種が多く見付かり、急増し続ける外来種についての講義を受け、生徒は興味関心を抱きながら、外来種が生態系に影響を与えていることを実感することができた。矢作川や御立公園の整備・研究を通して環境問題を身近な問題として捉えることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「国際交流活動」

**ねらい：海外への修学旅行や
オーストラリア姉妹校との交流事業を通して、
異文化を理解する態度を養う。**

２年生「総合的な探究の時間」では、台湾修学旅行に向けた異文化理解研究を進めている。同朋大学から講師を招いて、台湾の歴史と文化を学んでいる。探究活動として、事前に現地での調査項目を設定し、市内班別研修（B＆Sプログラム）で現地大学生とともに調査活動を実施する。また、オーストラリアのパスコベール女子校と隔年での受け入れ・訪問を行っている。

姉妹校交流

成 果　交流活動を通して、交流の楽しさや自分の思いが伝わった時の喜びを感じさせることができた。異文化理解への興味関心が高まったことに加え、経験を通して培った英語力、自主性や自己管理能力など、生徒が自らの成長を実感した。

実践内容❸
「総合学科の特色を生かした地域貢献活動」

**ねらい：「まちづくり」事業を通して、
生徒を未来の地域社会を担う人材へと育てる。**

総合学科の特色を生かし、科目選択プランでの実践的な学びを地域の活動に生かしている。生徒の自主性を重んじ、部活動の生徒による野外公演、産学連携事業などに取り組んでいる。地域のまちづくりのイベントの一環である「ふれ愛フェスタ」では、保育プラン・JRC部による紙芝居やゲームコーナー、服飾プランによるフリーマーケット、美術プラン・美術部による似顔絵コーナーを企画・運営した。商学連携として「チーム八日市」ではビジネスプランが商店街のフラッグを制作した。また、調理・栄養プランは道の駅「どんぐりの里いなぶ」との合同商品開発に取り組んでいる。

ふれ愛フェスタ

成 果　生徒が地域社会に主体的に関わり、コミュニケーション能力や企画力、社会参画のスキルを身に付けるとともに、達成感を味わった。日頃の学習が社会貢献につながると実感できたことで、更なる学びへの意欲につながっている。

おわりに

環境教育、国際理解教育、地域連携教育の３つの柱を中心として教育活動に取り組んでおり、新たにSDGs（持続可能な開発目標）の視点を取り入れて、多様なテーマで教科横断的な学習を進めようとしている。本年度より１年生「産業社会と人間」では「SDGsを知る新聞づくり」という新しい単元を加えた。世界の抱える問題について多角的に考え、課題の解決策を探究していくことで生徒の生きる力を育んでいきたい。

環　境 | **国際理解** | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防　災 | エネルギー | その他

名古屋市立北高等学校

創　立：1963年
住　所：〒462-0008 名古屋市北区如来町50番地
連絡先：TEL 052-901-0338　FAX 052-902-1596
学級数：21　生徒数：838人
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kita-h/

SDGsアクションを起こせる人材の育成

はじめに

本校は2015年度より国際理解コースを開設し、NPOへの活動協力を通して、ESDに積極的に取り組んできた。2018年にユネスコスクールとなり、その活動をホールスクールの取り組みにしていくために、ユネスコ委員会を立ち上げた。自主的な活動を継続させるために、生徒自身の当事者意識を高める活動から始め、生徒による生徒のための企画を支援している。SDGsの啓発活動や活動実践を通して、生徒たちがグローバルイシューに自分事として自発的に取り組める活動を支援している。

実践内容❶「ユネスコ委員会の活動」

ねらい：生徒が自ら問題を見つけ、その問題への取り組みを自ら発案し、実践していく力の育成

ユネスコ委員会の最大の特徴は、他の委員会とは異なり、委員が各クラスから選出された1名と有志参加者からで成り立っているところである。多くのプロジェクトを実践しているが、その中心となる多くがSDGsに興味を持って集まった生徒たちである。また、前期の活動に参加すると引き続き後期も有志で参加する生徒も多数いる。活動の意義や達成感が感じられることが大いに影響していると思われる。

本年度は啓発活動として北高版SDGsカルタを作成した。生徒から読み札を募集し、文化祭で、読み札を巨大掲示した。カードの編集製作を委員会で行い、完成後は校外での啓発活動として、近隣の老人施設やこども食堂などに寄贈したいと考えている。

ボランティア活動として、古本を回収し、NPOアイキャンを通して、フィリピンの路上で生活している子供たちの支援し、また、不要な布マスクの回収を行い、必要としている施設へ寄贈した。生徒自身が回収方法の企画や、NPOや施設への連絡などを実践した。

フェアトレード啓発活動として、フィリピンへの支援となるフェアトレードマスク販売や、ドキュメンタリー映画鑑賞会とチョコレート販売を企画実践した。啓発活動が販売促進につながる方法など、互いに意見を出し合い計画を実践することができた。

北高SDGsカルタ

成　果

SDGsを学んでも、まだまだ全ての生徒にとって自分事にならず、明らかに主体性という壁があった。しかし、最初は真意が分からず参加していた委員も、徐々に受け身から脱し、必要性を感じ、小さな行動を起こしていった。その変化を感じながら、多くの企画実践をサポートすることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「NPOフリー・ザ・チルドレンジャパンと共に」

ねらい：自分たちでも行動を起こせること、またその手法を学び、実践に結び付けられる生徒の育成。

フリー・ザ・チルドレンと共にワークショップ

NPOフリー・ザ・チルドレンの創設者グレッグ少年はわずか13歳で仲間を集めてNPOを設立した。生徒に13歳の少年でもアクションを起こせることを学ばせ、自分たちも主体的に活動できることを再認識させた。フリー・ザ・チルドレンの貧困から子供を救うという活動の意義についてゲームを通して学び、貧困のループについて考えた。貧困は海外の貧しい国で起こっている他人事ではなく、日本でも大きな社会問題になっていることにも触れ、自分たちにできることを考えた。アクションは難しいことではなく、自分のできる事、得意な事をアクションに結び付けられるという新たな発想を学び、生徒はグループでアクションの手法を出し合った。

成 果　アクションを起こすことができる人は、特別な人ではなく、自分の得意を生かしてアクションを起こせるという新しい発想を得て、生徒は生き生きと多くの手法を出し合えた。今後古本回収やホームレス支援のためのタオル回収などの活動に生かしていく。

実践内容❸
「ユネスコスクール交流会に参加して」

ねらい：ユネスコスクールの交流を深め、お互いのプロジェクトから相互に学ぶ。

ユネスコスクール交流会

ユネスコスクール交流会に本年度初めてポスターセッションではなく、実践報告として参加した。コロナ禍での開催ではあったが、実際に会場で発表するということで、ユネスコ委員会で発表者を募り、有志の生徒が、ユネスコ委員会の設立と、昨年度から本年度までに実践した活動について報告をした。生徒はパワーポイント作成や、プレゼンテーションの練習にも余念がなく、発表は成功を収めることができた。北高版SDGsカルタに関しては質疑もあり、多くの学校に関心を持っていただくことができた。小さな活動ではあるが、たくさんの実践をしてきたことを振り返る機会を得て、今後の意欲に結びつく、実りある交流会であった。

成 果　多くの交流会がオンライン開催となる中、実際に発表する場を得ることで、お互いの活動をより身近に感じることができた。目標を同じくする仲間と活動を共有し、多くのアイディアを生み出す交流会は、生徒にとって大切な行事となっている。

おわりに

委員会を発足したことで、自主的な実践活動が増えてきた。啓発のための国際理解講演会と共にユネスコ書き損じはがき回収や、NPO支援の古本回収といった実践や、他団体の活動への参加だけでなく、本校独自の活動となるフェアトレード推進活動も、定例行事として定着しつつある。本校のモットーは「楽しくサスティナブルな活動」である。SDGsは、高校時代だけで終わる活動でなく、2030年で終わるわけでもない。楽しさを意義ある活動へ繋ぎ、生涯を通じて世界の問題に目を向けられる視野を、今後も生徒に育んでいきたい。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

名古屋市立山田高等学校

創　立：1978年
住　所：〒452-0817 名古屋市西区二方町19-1
連絡先：TEL 052-501-7800　FAX 052-504-2968
学級数：21　生徒数：827人
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/yamada-h/

なごや発「地球人」の育成をめざして

はじめに

「命の尊厳に思いを馳せることができる人間」「自他の心の痛みを理解でき安定した情緒を持つ人間」「身の回りの自然環境がいかに貴重なものであるかを知る人間」このような人間の育成を目指し、「命・心・環境」を大切にする「人間教育」の実践に取り組み、平成24年12月に名古屋市立高校ではじめて「ユネスコスクール」に認定された。その後も活動の幅を広げ、「防災」「国際理解」の実践活動にも取り組んでいる。

実践内容❶
「AEDトレーニングなど人命救助に関わる体験活動」

ねらい：生徒が命の大切さを感じるとともに、救急救命法の基礎を習得できるようすること。

「人間教育」の実践が継続的に行われるように、できるだけ教育課程の中に位置づけている。2年生の「総合的な探究の時間」をユネスコタイムと位置づけ、「命・心・環境」をテーマとするさまざまな探究活動を「地理歴史・公民科」「理科」「保健体育科」の教員が担当している。生徒は3つのグループに分かれて1週間ごとに各科の担当する内容を順番に受講している。

「命」に関わる体験活動として、保健体育科教員が中心となって「心肺蘇生法とAED」に関わる講座を開催している。

人形とAEDトレーナーを使った実習

この講座のために教員は、応急手当普及員の資格を取り、定期的に更新しながら生徒を指導している。生徒はグループ毎に分かれて心肺蘇生のトレーニング用人形とAEDトレーナーを使い実習を行う。1学期は主に傷病者発見から胸骨圧迫と人工呼吸について学び、2学期はAEDについて、3学期は年間のまとめと傷病者の運搬法について学んでいる。認定試験に無事合格した生徒には普通救命講習修了証が渡される。

また、1年生の「家庭総合」の時間を活用して「赤ちゃん交流授業」を実施している。これは赤ちゃんの保護者から、出産や子育ての喜びや苦労を聞き、実際に赤ちゃんとふれあう活動を通して命の素晴らしさを体感している。

成　果

救急救命の基礎を1年間かけて学ぶことで、AED機器の使用にも臆することなく、居合わせた人々と力を合わせて緊急時に対処する力を育むことができている。本校近くの大型商業施設で倒れた方がいたときに、偶然通りかかった本校生徒が迅速に対応して救助に当たったということがあった。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「防災委員会活動を軸とした防災活動の取り組み」

起震車体験と地震発生時の対応

ねらい：身近に起こりうる自然災害について理解し、自助共助の意識を高めること。

１年生各クラスから２名の防災委員を選出し、委員会として年２回の「防災新聞」を発行している。１学期に名古屋大学減災館や名古屋市港防災センターなどの施設見学を行い、学んだことを全校生徒向けに新聞にまとめて発行している。さらに２学期には名古屋市消防局の協力を得て「起震車体験」や「煙道体験」実習を１年生全員で行っている。

また、入学時に非常食を購入して学校に保管し、卒業時に返却する取組を行っているが、その試食会を実施して非常食の新規購入品の選定も行っている。

これらの活動が、２年生の修学旅行における神戸市での防災学習「人と防災未来センター」訪問につながっている。

成 果　平成12年の東海豪雨では新川が決壊して校舎が浸水した経験があり、通学地域が広い本校では自然災害の際に帰宅困難者が多数出る可能性が高いため、水害や地震に対する備えについて関心が高まっている。

実践内容❸

「伊勢湾に流れ込む「新川」水質検査の取り組み」

学校北側を流れる新川水質検査の様子

ねらい：水質検査を通して環境や川の歴史と人間生活などとの関連について考えること。

「新川」は、江戸時代に開削された庄内川水系の人工河川で、戦前から交通の便もよいため紡績工場や染色工場などの繊維工業が発達し、高度成長期には住宅地域にもなっていたため、工場排水や生活排水で相当汚染されていた。近年は、繊維工業関連の工場が無くなり、下水道の整備も進んだため汚染も減少している。

２年生の「総合的な探究の時間」で理科教員の指導のもと、バケツで川の水を汲み、試薬を用いてpH値を調べ、記録する活動を継続している。このデータをもとに経年変化を研究し、毎年３学期に名古屋市科学館で開催される「高校生科学の祭典」で発表している。

成 果　本校は「新川」堤防沿いに立地しており、その堤防は学校風景の一部となっている。その川の水はどこからきてどこへ流れていくのかという素朴な問いから始まり、生態系や川の歴史、人間生活との関連まで考察することができる。

おわりに

本校の一連の活動は他にも、１年生対象の「性講話」や近隣の特別養護老人ホームとの交流、生徒・保護者・教職員が地域清掃活動を行う「若竹クリーンプロジェクト」、オーストラリアの姉妹校からのホームステイ受け入れなど多岐にわたっている。今後は、「ユネスコスクール委員会」が中心となり、SDGsの観点をより多く取り入れた改善を進めることが課題となっている。時代と向き合い、新たな時代に生徒がより一層活躍できることを願いつつ取組を継続していきたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

名古屋市立名古屋商業高等学校

創　立：1884年
住　所：〒464-0044 名古屋市千種区自由ヶ丘二丁目11番48号
連絡先：TEL 052-751-6111　FAX 052-761-7508
学級数：21　生徒数：830人
H　P：https://www.nagoya-ch.ed.jp

世界を視野に持続可能な社会を地域から創る

はじめに

日本に商業学校が誕生したのは、1884年。その年に名古屋商業高校は誕生した。「一に人物、二に技倆」の精神と「三恩を感謝すべし、商士道を発揮せよ、世界は我が市場なり」の校風三則は、グローバル社会の現代でも、脈々と受け継がれている。世界を見据えて活動する学校理念に沿ってESDを実践の場として捉え、ユネスコスクールに申請し2014年に認定された。世界を視野に地域で貢献し、持続可能な社会を創造・構築できる人材の育成を目標に活動をしている。

実践内容❶
「葦から“Zoo”Synergy」

ねらい：プラスチックから自然物へと原材料を置き換えることで、プラごみの排出抑制を目指した。

一見、何の役にも立ちそうにない、川辺や干潟に生息する“葦”。しかし、この植物は「水質浄化」と「生物多様性の維持」の２つの効果を発揮している。こうした葦原を保全するため、葦の繊維を原材料とした布製品の商品化に取り組み、結果的に５種の製品を誕生させた。

昨年度からはSDGsの多様なゴールに到達するため、「プラスチックごみの排出抑制」を新たな目標に掲げることとなった。現在、プラスチックは多くの製品に利用されているが、これがごみとなったとき、焼却処理によるCO_2の排出や海洋汚染など、環境に深刻な影響を及ぼしていることも事実である。

この問題を解決するため、これまでテーマとして来た葦を利用することで、ごみの排出抑制につながる方法を探求した。こうした活動の中から導き出された商品が、プラスチック素材を自然物である葦に置き換えた「葦のストロー」である。開発段階では様々な試行錯誤を繰り返しながら、以下の製造工程を導き出した。

選別 ➡ 裁断 ➡ 研磨 ➡ 洗浄 ➡
➡ 煮沸 ➡ 消臭 ➡ 乾燥 ➡ 完成

さらに、ストローにより高い商品価値を付与することを目的に、「おみくじ」を刻印するアイデアを思い付き、愛知県立名古屋聾学校の皆さんと“協働”で作業している。

また、ストローの製造は、生活介護施設ヒュッゲおがわのもり様に委託した。これにより、ハンディキャップを持つ方々の社会参画と、わずかながらでも収入をもたらす就労機会の拡大も夢ではない。

おみくじ付き葦のストロー

成　果

ストローの材料を変更することでもたらされる抑制効果が、プラスチックごみの全体量から見れば微々たるものであることは承知している。しかし、身近な日用品から、ごみ問題に目を向ける方が一人でも増えれば、私たちの目標達成に向けた歩みが、わずかながらでも前進したものと自負している。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう | 2 飢餓をゼロに | 3 すべての人に健康と福祉を | 4 質の高い教育をみんなに | 5 ジェンダー平等を実現しよう | 6 安全な水とトイレを世界中に | 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「SDGsとニューノーマルに対応した会社運営」

ねらい：SDGsの理念・ニューノーマル対応・経営学習から持続可能な開発のための商業教育

学校祭における電子決済システム実習

これまで地元企業の協力のもと商品開発・販売実習を行ってきた。しかし、その活動のみが商業教育ではないと考え、生徒自ら考え行動し、ビジネスをデザインすることを目標とした学習を行うことにした。その中で模擬学習のみでは学べることに限界があると考えた。実践的に学ぶために生徒が自ら関わり合同会社設立を行い、運営を通して学ぶ環境を整えた。令和元年７月には会社設立登記が完了して運営を開始した。しかし、令和２年５月まで新型コロナウイルス感染症により休校となり、学習の歩みが一時停止した。それでも活動を縮小して少しずつできることを進めてきた。どのような環境であっても新たなビジネスモデルを考え、実施・学習する必要性を強く感じた。

７月中旬頃、協力企業にビジネスの状況について電話で聞き取り調査を行った。その調査では、集客状況などが完全に回復するのには数年かかることが判明した。また、感染拡大防止のため、試食を伴う対面販売（販売促進）が禁止されていた。従来のようなストアオペレーション（店舗運営）は困難であり、思考そのものを大きく転換して会社経営をする必要性があった。そこで、新型コロナウイルス感染症の影響で利用の需要が高まっているインターネットを活用した販売を行うことを模索した。様々な企業を独自の項目で比較検討し、日々の業務を高い品質で効率的に行えるAmazonで商品を出品することにした。審査を通過して出品が可能になり販売拡大の機会を得ることができた。しかし、インターネットと対面販売の併用も考え、接触リスクを減少させた店舗運営もあわせて考えた。代金決済では非接触型電子決済システムの導入を決定した。同時に販売分析・売上管理などに対応する最新レジの導入も行った。旧式のレジスタではなく、低コストであり、操作性・汎用性の高いタブレットを利用したAirレジ・AirPAYの導入を行った。

また、本校のマレーシア姉妹校との交流を通じた活動も行った。マレーシアはイスラム教が国教であり、現在は日本にも多くのイスラム教の方々が暮らしている。しかし、日本は必ずしもそのような方々が暮らしやすい環境があるとはいえない。そこで、ハラル認証マークを取得した食品を開発し、より過ごしやすいまちづくりを目指した。また、開発の際に、地元の名産品である「八丁味噌」や食材を使用することで、地産地消と輸送時に発生するCO_2排出削減に貢献することができた。地元の食材を用いることで、日常の商品としてだけでなく、新型コロナウイルス感染症が収束した際に、イスラム教徒の訪日外国人へのお土産としての役割も果たすことが可能である。

マレーシア姉妹校 国際交流と授業参加

成 果

インターネット・書籍調査では不足情報が多く、自ら考え実践を積み上げることの重要性を学んだ。校内で電子決済システム実習を行うことができた。会計処理削減と作業効率化、データ蓄積・分析により効率的運用が可能となった。ハラル認証商品の開発では、イスラム教と食への理解が深まり、SDGsに貢献できた。

おわりに

企業と他校をつなぐ商業的活動やマレーシア姉妹校との交流の中で、他と協働することの大切さを学び、生徒は成長した。コロナ禍という今まで誰も経験したことのない環境であっても、生きる力を育み、ユネスコの活動を通じて、主体的に社会に関心を持ち、問題を解決する力を身につけた。今後もSDGsに貢献し、平和で誰もが幸福な人生を歩める社会の創り手になる活動を続けていきたい。

環　境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防　災　エネルギー　その他

中部大学第一高等学校

創　立：1938年
住　所：〒470-0101 日進市三本木町細廻間425
連絡先：TEL 0561-73-8111　FAX 0561-73-8031
学級数：38　生徒数：1,419人
H　P：https://www.chubu-ichi.ed.jp/

ESD・SDGs探究から望む地平

はじめに

本校の建学の精神は「不言実行、あてになる人間」であり、ESDを通して未来を見据える見識と実行力を兼ね備えた人材を育成することを目標としている。一連の学びが次の進路へとつながるように、本校ではSDGsを各授業に位置付けており、「総合的な探究の時間」を核にICTを活用した授業を展開している。また、コース、クラス、部活動単位でも多様な活動が行われている。より質の高い教育活動が可能となるような仕組み作りも進めており、ESD海外研修や地域連携プロジェクト、ESD大賞研究活動発表会などを実施している。

実践内容❶
「ESD・SDGs探究プロジェクト」

ねらい：思考力・表現力・判断力などの力を養いながら、専門的な学問領域の入口に触れる。

「総合的な探究の時間」では、普通科特進コースを中心にSDGs探究プロジェクトを実施している。本活動では、各自の「興味関心」、「将来研究したい学問分野」、「SDGs」の３つの観点を包括的に捉えながら、ソロプロジェクトとして探究テーマを設定する。テーマ設定に際しては、「教科やSDGsとの関係」、「社会的意義」、「フィールドワーク及びデータ分析の手法」、「仮定・推測される成果」から探究テーマを再構成することで、具体的で広がりのある探究テーマの設定が可能となる。iPadを利用しながら研究計画を作成し、フィールドワークやデータ分析を行いながら探究プロジェクトを進めるという流れとなっている。実際に設定されたテーマは、人文科学、社会科学、自然科学の多岐の領域に渡る。以下はテーマの一例である。

「建物の構造とマネジメントとのつながり」
「完全自動運転の実現に向けて」
「ハーブを使って生活に役立てる」
「街並みに合わせた自販機を観光資源として有効活用するには」
「世界遺産が地域に及ぼす影響と愛知県内での登録可能性」
「IoTデバイスを用いたデータ分析－売れなければ国際支援にはならない－」

各探究活動は本校で実施されている「ESD研究活動大賞発表会」及び「一高発表会」でプレゼンテーションやポスターレポートとして発表され、活動を共有する中で得られるフィードバックから探究の質をさらに向上させている。

ESD大賞発表会ポスターセッション

成　果

探究テーマが差別化されることにより独創性や創造性が高まっている。また、プレゼンテーションやレポート作成を通して表現力が年々向上してきている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「カンボジアESD研修」

ねらい：SDGsの多様な観点からの学びを通して主体的に行動できるグローバル人材を育成する。

バイヨン寺院修復活動

カンボジア・シェムリアップ研修は多様な学びのフィールドワークの場として位置付けられている。事前学習から現地研修、研修後の報告を一連の流れとし、各自が重視するSDGsの観点から研修を進めている。事前学習は、テーマ設定とiPadでの調べ学習（共通知識の獲得）、ディスカッション、プレゼンテーション（問題解決法の模索と仮説の設定）という形式で進められる。ここでの学習成果は、仮説に伴う現地での行動へと導かれる。

現地では、世界遺産アンコール・トム（バイヨン寺院）の修復活動、寺子屋交流、トンレサップ湖クルーズなどのプログラムを実践している。帰国後は学内外の研究活動発表会にて報告を行い、世界的諸問題への考察を深めている。

成 果　ESDに関わる資質能力調査を事前学習前と帰国後に実施した。主体性、協働性、コミュニケーション力、プレゼン力、課題発見能力、課題解決能力、知的探究心、SDGs理解の８つの観点から調査したところ、全項目で自己評価の高まりが観察された。

実践内容❸

「未来への語り部との交流から日進市の問題に切り込む」

ねらい：地域の児童を対象とする環境教育や住民との交流を通し、温暖化対策地域モデルの構築を目指す。

環境教育ワークショップ

本校ESD部は2015年より日進市環境課、一般社団法人環境創造研究センター、中部大学と連携しながら、愛知県日進市にてCOOL CHOICE（以下CC）プロジェクトを促進している。本活動の高校生による小学生環境教育ワークショップは、家庭でのCO_2削減に向けた環境配慮型アクションを考える場となっている。ワークショップではゲームをベースとした自作の環境教育教材（ボード、カード、クイズなど）を用いることで、小学生が楽しみながら環境配慮型ライフスタイルを考えている。

2019年からは地域市民団体メンバーである「未来への語り部」との交流を通して、CCの多様な観点から地域の諸問題へのアプローチを試みている。

成 果　小学生、高校生の双方向的な学びの場が実現している。事後の環境意識調査の結果分析により、教材の質は毎年向上している。「未来への語り部」との交流以降は「CC NEWS」動画の作成及び発信を実施しており、地域のCC認知度向上につながった。

おわりに

ESDは生徒個々の新しい可能性を切り開きつつある。特に、ICTの導入が進むにつれて、ESDの諸研究活動が顕在化し、発展を遂げたのは明らかである。ESDの実践において大切なことは、「生徒の興味関心をESDやSDGsにつなげること」、「創造性を刺激すること」、「進路希望を意識すること」である。今後は学校全体のESD活動評価スケールの整備を進める予定である。時代に応じて活動を見直しながら、学びの多様性に対応できる環境作りに取り組んでいくことが、生徒の未知なる可能性との邂逅（かいこう）につながるはずだ。

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、ESD活動やSDGsに関心のある小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学の、児童、生徒、学生、教職員、行政、団体が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子供たちが学び合いました。ここに集う子供たちの輝く笑顔は、私たちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

当日は、ユネスコスクールを中心とした小学校から高等学校までの児童生徒や教職員等約85名が集い、同時にオンラインでも約120名が参加し、活動発表や意見交換を行いました。

※今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、交流会を初めてオンラインでも開催いたしました。

日 時　2020年10月17日（土）正午から15時

会 場　ウィルあいち　3F大会議室　ほか
※あわせて、Web会議システム「Zoom」を利用しオンラインでも開催します。

主 催　愛知県教育委員会

後 援　日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

ポスターセッション

	大会議室	会議室４
① 12:00～12:15	**名古屋市立名古屋商業高等学校** 「SDGsとニューノーマル（新しい生活様式）に対応した会社運営」 合同会社設立までの過程と、SDGsの理念を持った商品を、ニューノーマルに対応した販売をするまでの報告。	**愛知県立豊田東高等学校** 「SDGsを知る新聞作り」 新聞作りを通して、社会とSDGsと自分との関わりを考える活動報告。
② 12:15～12:30	**豊橋市立嵩山（すせ）小学校** zoom 「SUてきな未来を　SEかいに発信～未来にはばたく『嵩山学』～」 ふるさと嵩山についての調べ学習「嵩山学」。校区の自然と、故郷に生きてきた方々との活動の報告。	**名古屋市立山田高等学校** 「心肺蘇生法の習得を目指して」 命・心・環境を大切にする実践の一つ、AEDトレーニングをはじめとした人命救助に関わる体験活動報告。
③ 12:30～12:45	**名古屋大学教育学部附属高等学校** zoom 「アジア高校生国際会議」 アジアと日本の高校生が名古屋大学で開催した「アジア高校生国際会議2019」について報告。	zoom 表示の２校はオンラインでの発表となりました。

参加申込校（順不同）

名古屋市立神の倉幼稚園	豊橋市立鷹丘小学校	豊橋市立前芝中学校	愛知県立豊橋南高等学校
長久手市立北小学校	豊橋市立東田小学校	大牟田市立宮原中学校	愛知県立田口高等学校
長久手市立東小学校	豊橋市立幸小学校	愛知教育大学附属名古屋中学校	愛知県立みあい特別支援学校
西尾市立寺津小学校	蒲郡市立竹島小学校	愛知教育大学附属岡崎中学校	愛知県立豊橋特別支援学校
高浜市立翼小学校	愛知教育大学附属名古屋小学校	名古屋市立北高等学校	名古屋大学教育学部附属高等学校
豊橋市立植田小学校	安城市立安城西中学校	名古屋市立名古屋商業高等学校	中部大学第一高等学校
豊橋市立賀茂小学校	新城市立作手中学校	名古屋市立山田高等学校	誉高等学校
豊橋市立西郷小学校	新城市立東郷中学校	愛知県立桃陵高等学校	岐阜県立池田高等学校
豊橋市立下条小学校	豊橋市立石巻中学校	愛知県立豊田東高等学校	愛知教育大学
豊橋市立嵩山小学校	豊橋市立青陵中学校	愛知県立刈谷北高等学校	愛知大学
豊橋市立玉川小学校	豊橋市立北部中学校	愛知県立安城東高等学校	椙山女学園大学

交流会プログラム

11:45	**受付開始** ～会場移動	
12:00～12:45	**ポスターセッション** ※左ページ参照	
会場移動・休憩		
13:00	**開会行事**（主催者挨拶） 愛知県教育委員会教育管理監 稲垣 直樹	
会場移動		
13:10～14:00	**分科会**（ユネスコスクール活動発表）	
	大会議室	**中部大学第一高等学校** 「『未来への語り部』との交流から日進市の問題へと切り込む」 COOL CHOICEの普及を目的とした動画作成と日進市の語り部との交流、それらを通じて見えた問題点についての報告。
		豊橋市立西郷小学校 zoom 「西郷の最高の柿？柿！柿♥」 地域で100年以上栽培され続けている柿を郷土の誇りに思い、そのよさを伝え広めようと努力した活動の報告。
		ディスカッション ファシリテーター：愛知教育大学 理科教育講座 教授 大鹿 聖公 氏
	会議室４	**名古屋市立北高等学校** 「北高ユネスコ委員会の取り組み」 北高ユネスコ委員会によるSDGsの啓発活動や実施したアクションの報告。
		豊橋市立玉川小学校 zoom 「４年生出動！『みんなで守ろう！ぼくらの神田川』大作戦」 ふるさと神田川の環境を守り、地域に愛される川にするために自分たちに何ができるかを追究した活動を報告。
		ディスカッション ファシリテーター：一般社団法人SDGsコミュニティ 代表理事 新海 洋子 氏
会場移動・休憩		
14:10～14:50	**基調講演** **「地球にも人にも優しい『SDGs』～宅配ボックスやマイボトルが果たす役割」** zoom 講師 牛窪 恵 氏（世代・トレンド評論家） ※基調講演についてもオンラインで実施いたしました。	
14:50～15:00	**まとめ** 基調講演講師とファシリテーターによる本交流会のまとめ	

zoom 表示の２校はオンラインでの発表となりました。

当日の参加者の声

今日の交流会についての感想

高　校　生	ジャンル様々、年代様々の活動を知る事ができ、良い刺激になりました。
教　職　員	オンラインでの参加が、これからも広まっていくと良いと思いました。高校生と小学生の対話が成立していることに感動しました！
高　校　生	どの発表も、問題を受け止めそれに対して自分達で調べ解決策をさがして、問題を解決していってこの能力はこれからの社会で広く使えそうな能力だと思った。
高　校　生	自分は関係ないと思わずに、いろいろなことに興味を持って行動にうつすことで、1人1人のその行動が世界をもっと良くするのかと思えるようになれたから、何ごとにも考えてみることが大切だと思った。
教　職　員	オンラインで参加できるということで参加を決めました。もし、会場まで足を運ぶということなら都合がつかず断念してました。来年以降もこのような参加ができますようによろしくお願いいたします。
教　職　員	WEB開催の取組は大変よいと思う。オンラインでも交流できる場面があれば、さらに理解が深まると思う。

ユネスコスクールやESDの活動の充実のために、必要だと思うこと

高　校　生	他の学校の情報や知識を取り入れながらこれからも活動できるといいと思いました。これからもたくさんの人と交流したいと思いました。
高　校　生	楽しむ心と相手の気持ちを深く知ること。
教　職　員	地域で発表する機会や小中高大で連携した活動ができる場や仕組みが必要だと感じる。
高　校　生	マイボトルをもっていくという話があったように小さなことでも工夫していきたいと思いました。また、こういった現実があるということを僕らが若い人に伝えていくことも大切なことなんじゃないかと思いました。
教　職　員	ESD活動を紹介するアーカイブを作り、広く多くの学校に利用してもらえるよう広報すること。ESD活動について企業やNPO、および専門家と学校をつなぐコーディネーターづくり。
一般参加者	難しい、大変と感じると、なかなか取り組みにくいので、楽しく、気軽にできる実践が広がるとよいと思いました。楽しいと主体的に活動する学校が増えていきそうです。

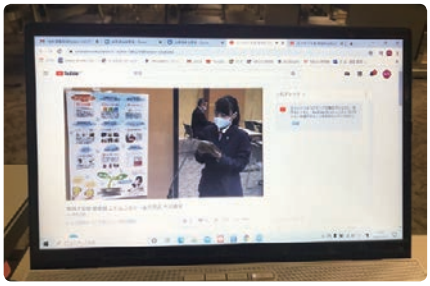
ポスターセッション

活動発表（オンライン）

オンライン参加を交えたディスカッション

基調講演（オンライン）

会場の様子


YouTubeでの配信の様子

ユネスコスクール活動事例集　第8集

令和3年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課
〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電　　話 052-954-6780（ダイヤルイン）
ファックス 052-954-6962